

漢法苞徳塾資料	No. 030
区分	診断・脈診
タイトル	簡易脈診法解説
著者	八木素萌
作成日	1992.02.02 訂 (1990.08 夏期合宿 1991.08 補訂)

◎関前一分の脈を左右で比較対照する脈法である。

「手での人迎気口脈診」法とか「脈口部人迎気口脈診」法とも言う。

◎浮沈・虚実・数遅・滑濇の八祖脈を観察して、脈図に記入する。

熟練するに随って、太細・長短の四種類の脈状も加えて、十二祖脈として良い。

◎脈図について

☆右左は患者の手の左右を言う

☆滑濇の脈状は、習熟するまでは、時計で計測して印象値と実測値を対照して判断することにする。

滑脈：印象値＞実測値

濇脈：印象値＜実測値

※脈の数遅・虚実の印象に較べて、実測すると実測値の方が遅いのかなと診えるのが滑脈であり、この反対の状態が濇脈である。このように定義する。

※実測値とは一分間の呼吸数と脈拍数を時計で計測した値のことである。この値は必ず記録する。

◎八祖脈の程度は、{微かに}=微、{明瞭に}=明、{甚だしく}=甚、のように区分して記録する。

十二祖脈に摂る場合でも同じである。

◎この脈診法の利点は、

◇脈状が記録できること、

◇五臓区分ができること、

◇比較法によって六部定位脈診法の経脈判定に近似値の判定が可能、

◇種々の脈診法中で最も簡便である事、などの点にある。

◇左<右…………「内傷病」

経脈の虚実の意味では、主に肝・腎の虚、浮数の脈で他の診察情報も陽病・腑病・外感病を指示している場合は、主に胃・大腸の実である。

但し「温病」の場合は外感病でも斯様に出うる

◇左>右…………「外感病」

経脈の虚実の意味では、主に肺・脾の虚、浮数の脈で他の診察情報も陽病・腑病・外感病を指示している場合は、主に胆・膀胱の実である。

注意事項

- a) 関前一分脈が左右に比較不能な場合がある。それは奇経の脈状が現われている状態が主局面の場合である。
- b) 「内傷」と「外感」の区分をこの脈法だけで確定しようとするのは無理がある。温病の場合には「外感」であっても、【左<右】のように現われる、この点注意を要する。「外感」を示す状態は、腹部の膨張満・特に上腹部の膨張満と便秘気味〈但し兎糞や裏急後重の気味やは虚〉、手甲の熱、募穴反応の方が背腧穴反応よりも明瞭、病勢は急で症状が激しい、思い当たる原因が明確、熱・躁・煩が見られる、その他の陽性反応が主である。
- c) 平脈（健常な脈）は1分に65～70拍とし、これよりも遅いものは遅脈とし、速いものは数脈とする。または、健康者の1呼吸あたり4.5拍を平脈とする。
- d) 左右の脈状が極端に異なっている場合には、病症に等質な脈状を示す側を主な脈状として扱える。反対側の脈状も記録して、病像を立体的にイメージする場合の重要な資料として取り扱うべきである、四診を総合して病解し、統一的に病像がイメージされた時に、左右の脈の極端な差異について合理的に説明が付いていなければ、不十分な病解であるか正しくない病解であるか、を意味しているので、その場合には病に関するイメージを構成し直すべきである
- e) 脈診の結果は、必ず八虚診や腹背診や尺皮診やその他の診察情報と比較対照して、病解しなくてはならない。何よりも、五臓分類と病因診別が必要である。外感病は主として変動経を対象に施術し、其の際には主に七十四難を運用し六十九難も併用することがある。内傷病は主として病臓の経と腧募穴を対象に施術し、亦その際には主に七十五難と剛柔関係を運用して治療する。

◎脈の「来去」の記録とその意味

脈拍が拍動してくる時の状態は「来」と言い、気が「陽」に在る事を意味する、

a) 立ち上がりが力強く鋭いか、

b) 弱々しく鈍い立ち上がりであるか、

が対称的である。「来」の「陽」は、aは陽の実、bは陽の虚、となる。

「去」は脈が衰退する＝引いて行く状態の事で、

a) ストンと落ちるように引いて行くか、

b) モタついてナカナカ衰去して行かない状態にあるか、

が対称的な姿である。「去」の「陰」では、aは陰の実、bは陰の虚、である。

◎脈状は極めて微妙なものであるから、脈状のイメージが診察するものの頭の中にシッカリと形成されている必要がある。同時に脈状の持っている基本的な生理的病理的な意味を知っておく事が是非とも必要である。

八祖脈の陰と陽……………陽脈：浮脈・数脈・実脈・滑脈

陰脈：沈脈・遅脈・虚脈・濇脈

十二祖脈の場合……………上の八脈は同じ

陽脈：太脈・長脈

陰脈：細脈・短脈

◎平脈について

平脈とは健常な脈の事である。『難経』脈論の記述を整理すると、平脈とは

a) 一呼吸の間に4～5拍（4、5 拍手）し、大小・浮沈・リズムなどに不安定さが無い、寸尺のバランスも良好で、脈が和緩である。

b) 脈位に適当な脈長で拍動しており、寸部を越えたり尺部から溢れ出て深入したりする、と言うことが無い。

c) 50拍の間に1拍も結滞することが無い。

d) 季節に応じた脈状（四時六経の脈）を呈しており、和緩であり、浮中沈での「中脈」も、「呼吸の間の脈」も、拍動が平和である。

e) 「先天の気」を意味する「沈脈」「尺部の脈」は良好であり、全体としての脈状も面色に応じている。

以上のようになる。

この記述は、3、4、6、7、11、13、14、15、17、19、23、の諸難から整理したものである

◎病脈について

『難経』脈論の記述を整理すると、病の脈とは、

a) 胃の気の脈（浮中沈の中脈・寸関尺の関脈・呼吸の間の脈）が不足し、季節の脈に反しており、和緩とは言えない。

- b) 数脈または遅脈に偏っている（数脈の場合の方が基本的）。
- c) 脈の陰陽（尺と寸、浮位と沈位、脈状の陰陽…浮・滑・長の陽状の脈と沈・濇・短の陰状の脈）のバランスが失われ不安定（六部・寸尺・浮沈・脈状ともに）である。
- d) 五臓を意味する脈状が偏って現われて何臓の脈状かを辨別し易くなる。
- e) 大過と不及が在る（本位の脈長・四時の脈状・五臓の脈状等において）。
- f) 50 拍以内に結滯することがある。
- g) 病証の意味する処（シンボルとしての声・色・臭・味・液…主に色を代表として）と、脈状の意味する事との間に矛盾が見られる（色と脈の関係が相生的なものは予後良好、色脈の関係が相剋的なものは難治または予後不良）。

以上のようになる。

これは、『難経』の 3、4、6、9、10、11、13、14、15、16、17、18、19、20、21、23、24、34、37、40、48、49、52、58 等の諸難の記述から整理したものである。

◎季節の脈（四時六経の脈）について

菽法脈診の意義について

3 菽－肺・ 6 菽－心・ 9 菽－脾・ 12 菽－肝・ 15 菽(至骨)－腎のように、各菽に配されている臓の脈状が拍動している訳であるが、脈状がこれらの菽部分に相応していない場合や、本来の脈状に他臓の脈状が混合されている場合がある。このような変容は、その脈状の示している臓の五行は、病因の五行を指示しているものである。例～3 菽に‘毛’とか‘濇’として記述されている「肺」脈状に、‘弦’脈が混合して拍動している場合や、‘毛’や‘濇’の脈では無くて‘弦’脈が拍動している場合には、‘弦’＝木・木＝風によって、肺に風邪が病因となっている事が示されている。

◆四時の脈

春（木）の脈……弦脈、
 夏（火）の脈……鉤脈、
 土用（長夏・四季～土）……緩脈、
 秋（金）の脈……毛脈、
 冬（水）の脈……石脈

註……これらの脈名は五臓脈の名を一語で表現する場合にも用いられる。

また、弦・鉤・緩・濇・石の脈名は邪の五行性の表現ともなる。つまり、
 弦……風（木）、
 鉤……熱・暑（火）、
 緩……飲食労倦（土）、

濇……寒・涼（金）、
石……氷冷・水湿（水）、
の「気」を示すのである。

◆六経の脈

*一甲子の脈（陽気が出始めている時期）

陽気が生じ始めている時期であるから、陽は幼く弱々しく不安定である、この状態を反映して「少陽の至」と呼ぶ、脈状は大になるかと思えば小となり、短脈であるかと思えば長脈が現われる。

*二甲子の脈

陽気がシッカリと確立するので、これを反映した状態の脈状となり、「陽明の至」と呼ぶ、「浮大にして短」の脈状を示す。

*三甲子の脈

陽気は最盛期になり、それは脈状にも反映される、「太陽の至」と言い、「洪大にして長」の脈状を示す。

*四甲子の脈（陰気の出始め）

陽気が衰え始め、陰気が少しずつ成長して行き始める時期である、脈状にもそれが反映する、「太陰の至」と呼び、「緊大にして長」の脈状を示す。

*五甲子の脈

強まって行く陰気と、衰退して行く陽気とがほぼ均衡している時期で、陰気はシッカリと確立している、脈状にこれが反映される、「少陰の至」と呼び、「緊細にして微」の脈状を呈する。

*六甲子の脈

冬至前の六十日間に当たる時期であり、「厥陰の至」と呼び、「沈短にして敦」の脈状を呈する。

※敦〈オンにはタイもある、ここではタイでなければならない〉

〈在来‘ドッシリした’の意味に解釈しているものが大部分であるが、陰の終局であるのに‘ドッシリ’などありえない。〉

『傷寒論』の厥陰の脈の記述を考慮し参考にすれば‘敦’の音義に‘タイハイ’があるので、その意に訓む

☆「甲子」とは十干の冒頭が「甲」であり、十二支の最初が「子」である事から「甲子」という。十干と十二支を組合せで、日数を計算すれば、60日で一巡する事になる。従って「一甲子」は年の最初の60日を指している。『難経』では冬至を年の境としているので、具体的には冬至の翌日から60日と言う事になる。一年を「甲子」が6回めぐると見ているのである。1年の気候の循環では、冬至は純陰の日でその翌日から「陽気」が日一日と成長し夏至の純陽の日に

至る、夏至の翌日から「陰気」が日増しに増加して冬至の純陰に達する事となる。このような気候の「陰」「陽」の消長は、人身にリズムをもたらすと共に、其の事はまた「生理」的な陰と陽の消長を形成する事でもあり、それが脈状にも反映される。この部分の示唆は、

◆陽の脈状では

「一甲子」は「大」と「長」はあるが「浮」が無い、
 「二甲子」では「浮」と「大」で「長」が見えない、
 「三甲子」では「洪」と「大」と「長」である事
 ・「洪」脈は「浮」脈のより強い状態であり、陽性の脈ばかりである点。

◆陰の脈状では

「太陰の至」では「緊」のみ、
 「少陰の至」では「緊」と「細」と「微」で陰のみだが「沈」が記述されない、
 「厥陰の至」では「沈」と「短」と「敦」である。

つまり「陽状の脈」にも陽の程度によって姿に差異があり、「陰状の脈」にも陰の度合いに応じて脈の姿に差異がある、という点である。

◎五臓の脈状について

木―春 一肝―弦：春に芽生えた双葉の若芽のように濡弱で長の姿の脈

春風がソヨソヨと榆の樹の若葉を撫でているような姿の脈
 沈・牢にして長・吸入、弦にして急

火―夏 一心―鉤：存分に繁茂した樹木の梢がたわんで垂れ下がるような姿の脈

磨いた玉を連ねたものを撫循するような脈状
 浮・大にして散

土―長夏―脾―緩：呼吸の間、中緩にして大

金―秋 一肺―毛：スッカリ枯葉が落ちてしまっている梢が、葉の重みがとれて肅然と立ち、

それが秋風に震えている姿のように軽虚で浮いた脈状
 其脈来藹藹如車蓋・按之益大・日平
 浮・短にして瀡

水―冬 一腎―石：冬の盛りには水は氷結して石のようになるが、その氷の表面の濡れてツルツ

ル滑り、沈み込んでいるような脈状
 沈・按じて濡、指を浮かべて拍ってくる脈は実・吸入
 来去する脈の姿は浮では大きく沈では鋭くて、ちょうど雀の喙の濡れ滑る様子のような脈状である
 沈濡にして滑

◎奇経の脈について

★陽維脈の脈状

寸関尺三部に斜めに浮いており、寸は長掌筋腱に添うかのように、内側で尺骨寄りに拍動し、尺では外側に橈骨側に拍動する。主に左の脈口に出る。

★陰維脈の脈状

寸関尺三部に斜めに沈脈であり、寸は橈骨外側に拍動し尺の脈は尺骨寄りに中央部で長掌筋腱にまるで潜らんとするように拍動する。主に右の脈口に出る。

★陽蹻脈の脈状

両手の寸脈が浮いて強く拍動する。「前部左右弾者陽蹻」

★陰蹻脈の脈状

両手の尺脈が沈緊に拍動する。「後部左右弾者陰蹻」

★帯脈の脈状

両手の関脈が浮緊に拍動する。「中部左右弾者帯脈」

★督脈の脈状

寸関尺三部ともに浮緊で弦長に拍動する。

★衝脈の脈状

寸関尺三部ともに沈脈で牢で弦長に拍動する。

★任脈の脈状

寸関尺三部とも沈脈・緊細実長に拍動する。

「寸口辺丸々」『脈語』（呉昆）の補足…緊細実長至関者亦任也苦少腹澹臍下引横骨陰中切痛以上のようなことから関部の左右の脈状が比較困難な場合がある事が判かる。

◎脈状の生理的病理的な意味について

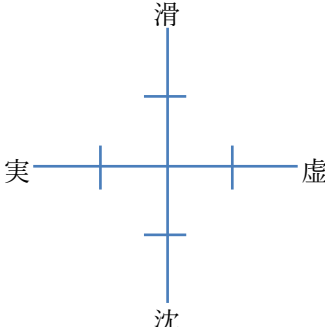
- a) 脈を診ると言うのは、単に血管内の血流の拍動の様を触知しているのでは無いのであり、血量・血粘度・心の拍出力や陰圧・脈管の柔軟度や緊張度・周囲組織の緊張度や密度からの影響など等を感じているのである。
- b) 身体が弛緩しているとか筋肉や皮膚が弛緩している時には血管も弛緩し血流もユツタリするし、反対に心身の緊張度が高い時には血管も血流も緊張度は亢ぶる。こういう点から患者を十分にリラックスさせてから診察を行なう事の必要性和脈状の帯びる基本的な意味とが了解されるのである。

c)

参考脈法		傷寒脈法	
浮	陽・表・風・虚	太陽	尺寸とも浮
沈	陰・裏・湿・実	陽明	尺寸とも長
数	腑・熱・燥	少陽	尺寸とも弦
遅	臓・寒・冷	太陰	尺寸とも沈細
滑	血の有余	少陰	尺寸とも沈
澹	気の滞（注 滑伯仁の説）	厥陰	尺寸とも微緩

漢法苞徳塾

脈診表（簡便法用）

計測値	呼吸数		左右比較					掌温・甲温比較		脈の来去図								
	脈拍数		左 右					掌温	甲温	来	去							
計測値印象値の比較		菽法	3	6	9	12	15	腹 力										
計測値	印象値	左	3	6	9	12	15	実		虚								
		右	3	6	9	12	15	やや実		やや虚								
尺皮診	青・赤・黄・白・黒・コワバル・熱アリ赤・ユルイ・シブル・シットリ																	
八虚診	左	肘(内)・肘(外)・季肋・陰股・膝裏																
	右	肘(内)・肘(外)・季肋・陰股・膝裏																
脈状図																		
甚 明 微 平 微 明 甚																		
浮																		沈
数																		遅
実																		虚
滑																		濇